鹿児島県立埋蔵文化財センター
Kagoshima Prefectural Archaeological Center

埋文だより

第４７号
平成２０年６月１８日発行

土坑墓内から多くの副葬品

埋葬当時の状態そのままに

土坑墓２

土坑墓１

天神段遺跡（志布志市有明町）は，東九州自動車道の建設に伴い，昨年度から発掘調査を行っています。この調査で，２基の土坑墓が並んで発見されました。どちらも南北方向を向いた長方形の墓で，中から銅鏡や磁器などが出土しました。

写真の，斜めに伸びる黒い筋は，ごぼう収穫に使用した機械の跡です。土坑墓２の白磁は，この機械の影響で割れていました。しかし，土坑墓１の青磁などはこの機械が掘った溝のわずか数cm下にあり，奇跡的に当時のままの状態で残っていました。（２面につづく）

目　次

・土坑墓内から多くの副葬品 …… 1
・在地の有力者の墓か/センター収蔵品２件が県指定文化財に …… 2
・平成20年度発掘調査・報告書作成予定遺跡 …… 3
・刊行！平成19年度発掘調査報告書 …… 4・5
・埋文豆知識⑦　土器に塗られた「赤い色」の正体 …… 6

在地の有力者の墓か

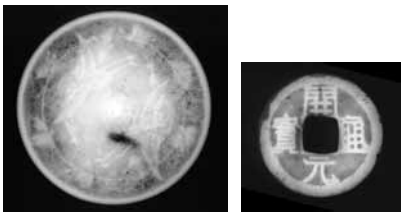
展　示　中
上野原縄文の森展示館
第21回企画展（7/13まで）

土坑墓１からは，完全な形の青磁や白磁の碗・皿が合計７点並んで出土しました。また，銅鏡，青白磁の蓋付小壺，古銭，和鋏，滑石製石鍋，鉄製紡錘車なども発見されました。

銅鏡と古銭をレントゲン撮影したところ，銅鏡は日本でつくられた「松喰鶴鏡」，古銭は中国でつくられた「開元通寶」であることが分かりました。また，青磁や白磁の碗・皿は中国からの輸入品です。これらの遺物から，この墓は12世紀後半から13世紀初頭のものと考えられます。

兵庫県の多利・前田遺跡などでも，副葬品の種類や量などがよく似た土坑墓が発見されています。当時の埋葬のあり方を考える上で貴重な資料となりました。

銅鏡出土状況


レントゲン写真（左：銅鏡，右：古銭）

土坑墓１遺物出土状況

センター収蔵品２件が県指定文化財に

指定年月日：平成20年４月22日

日本最古の女性像か

展　示　中
上野原縄文の森展示館
第21回企画展（7/13まで）

耳取遺跡（曽於市財部町）

耳取遺跡の発掘調査は，東九州自動車道の建設に伴い，平成11～12年に行いました。この調査で，旧石器時代から縄文時代の遺物が大量に出土しました。

今回指定を受けた出土品は，旧石器時代の第１文化層（約２万４千年前）から出土した狩猟具や動物解体のための道具であるナイフ形石器や剥片尖頭器，石核など総数203点です。これらの出土品は，当時の南九州の狩猟文化を示す貴重な資料として指定されました。

中でも注目を集めているのが，写真の線刻礫です。シルト質頁岩製の円礫を加工して，女性像を象ったものではないかという見方もあり，「耳取ヴィーナス」と呼ばれています。

縄文時代早期土器の変遷が明らかに　前原遺跡（鹿児島市福山町）

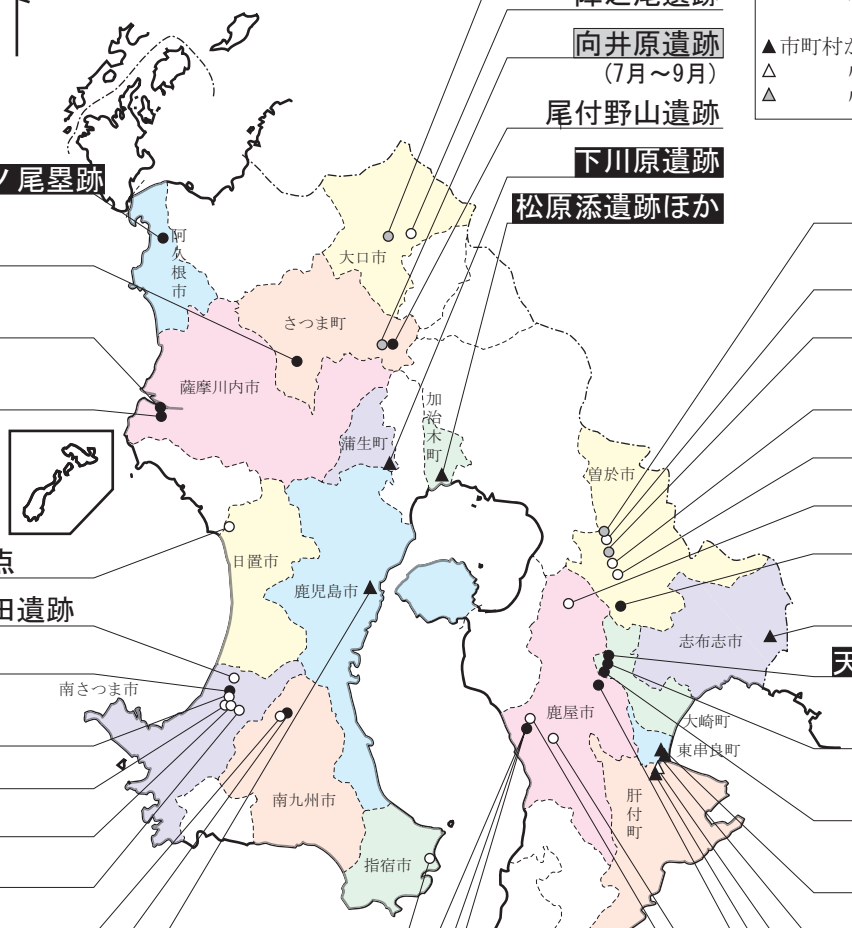
近日公開
上野原縄文の森展示館
第22回企画展（7/19～11/30）

前原遺跡の発掘調査は，南九州西回り自動車道の建設に伴い，平成３～８年に行いました。この調査で，縄文時代早期前葉（約9,500年前）の竪穴住居跡が25軒発見されるなど，縄文集落の様子を知る上で貴重な資料が多数見つかりました。

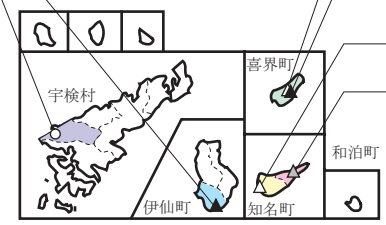
出土した土器は，貝殻で文様を施した円筒土器と角筒土器が中心となっています。特に角筒土器は，四角柱状に作られた土器で，全国的にも例がほとんどなく，南九州の縄文時代早期土器の特徴として注目されてきました。また，器形や文様の違いから８つの段階に分けられ，当時の土器の変遷を考える上で貴重な資料です。これらの中から，完全に復元できた22点が指定されました。

近くの遺跡に行ってみよう！ 平成20年度 発掘調査 報告書作成 予定遺跡

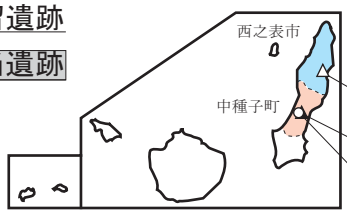
凡　例
- ●センターが行う発掘調査
- ○　〃　報告書作成
- ◉　〃　発掘調査・報告書作成
- ▲市町村が行う発掘調査
- △　〃　報告書作成
- ◬　〃　発掘調査・報告書作成



- 下ノ原B遺跡（5月・6月）
- 陣之尾遺跡
- 向井原遺跡（7月～9月）
- 尾付野山遺跡
- 下川原遺跡
- 松原添遺跡ほか
- 陣ノ尾遺跡・陣ノ尾墓跡（8月・9月）
- 虎居城跡（5月～平成21年3月）
- 川骨遺跡（5月～平成21年3月）
- 西之城遺跡（平成21年2月）
- 市ノ原遺跡３地点
- 中尾・桜谷・荒田遺跡
- 中津野遺跡（6月～平成21年3月）
- 小中原遺跡
- 市薗遺跡
- 芝原・渡畑遺跡
- 上水流遺跡
- 宮ノ上遺跡
- 鳴野原遺跡（7月～12月）
- 武遺跡
- 南摺ヶ浜遺跡
- 稲荷山遺跡（12月～平成21年3月）
- 早山遺跡（10月）
- 鎮守山遺跡（11月）
- 西原段Ⅰ遺跡（平成21年1月～3月）
- 野鹿倉遺跡
- 建山遺跡（平成21年1月・2月）
- 狩俣遺跡
- 定段・稲村遺跡
- 堂原遺跡
- 宮ヶ原遺跡（5月～平成21年3月）
- 井手上遺跡ほか
- 天神段・野方前段遺跡（5月～平成21年3月）
- 椿山遺跡（8月～11月）
- 柿木段遺跡（5月～平成21年3月）
- 北小牟田遺跡
- 唐仁古墳群
- 塚崎古墳群
- 鐘付・水喰遺跡
- 石縊・十三塚遺跡（5月～平成21年3月）
- 前畑遺跡
- 領家西・天神平溝下遺跡



- 面縄貝塚群
- 屋鈍遺跡
- 山田半田遺跡ほか
- 大ウフ遺跡（5月～平成21年3月）
- 友留遺跡
- 神屋当遺跡



- 三本松遺跡
- 大津保畑遺跡
- 大津保畑・小園遺跡

※発掘調査遺跡名下の（　）内は，調査予定期間（平成20年５月現在）です。
見学される際は，当センター，または各市町へご確認ください。

刊行！平成19年度発掘調査報告書

昨年度，当センターでは30遺跡分14冊の発掘調査報告書を作成しました。
ここでは，この遺跡の中から，特に注目される遺跡の遺構・遺物を簡単にご紹介します。

旧石器時代

２万年以上前の石器製作所

頭無迫田遺跡（南さつま市）では，ナイフ形石器や，三稜尖頭器・台形石器・スクレイパーや，その破片が多数見つかりました。破片と石器をを接合できたことから，石器製作の跡であると考えられます。

他にチャートの礫を集積した跡も見つかっています。

接合した資料

石器製作過程が明らかに！

仁田尾遺跡（鹿児島市）では，旧石器時代を中心に約15万点の遺物が発見されました。

約25,000年前のナイフ形石器文化では，拳ほどの黒曜石をもとに剥片を作り，それを加工して，ナイフ形石器や台形石器などが作られた過程が，接合した資料から明らかになりました。

ナイフ形石器(左)と台形石器(右)

縄文時代

土器を作り始めた頃の生活

向栫城跡（日置市）では，縄文時代初めの地層から，石鏃（石の矢じり）がたくさん出土しました。この頃，弓矢による狩猟が始まったようです。

石鏃

土器が語る，変化の歴史

鷲ヶ迫遺跡（鹿屋市）では，縄文時代前期の曽畑式土器，中期の春日式土器などが多数発見されました。

中でも春日式土器については，その移り変わりがよくわかる多様な資料が出土しています。

春日式土器(左)と曽畑式土器(右)

発見！縄文時代の落とし穴

曽於市の関山遺跡と唐尾遺跡では，縄文時代の落とし穴が発見されました。

それらの中には，約 9,500年前の桜島の噴出物で埋まっているものや，霧島の御池が約 4,200年前に噴火した時の火山灰が堆積したものがありました。

火山灰の堆積の違いから，落とし穴の作られた時期が推定できます。

早期の落とし穴の断面
関山遺跡

中期の落とし穴の断面
唐尾遺跡

古墳時代

住居跡と土坑墓

堂園遺跡Ｂ地点（南九州市）では，弥生時代終末から古墳時代初め頃の集落が発見されました。約500m離れたＡ地点では，同時期の大規模な墓地も見つかっており，この時代の集落と墓地の組み合わせが同じ台地上で確認された，県内で最初の例になりました。

また，住居内で鉄器製作に関係する道具が多く出土したことから，この時期の薩摩半島に鉄器作りが普及していたことがわかりました。

住居跡検出状況

中世（鎌倉･室町時代）

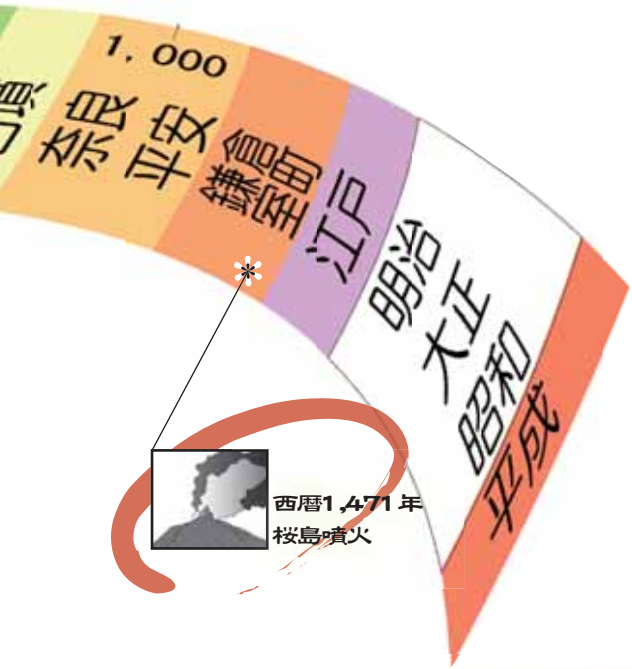
交流の中心地？

万之瀬川右岸にある持躰松遺跡（南さつま市）と上水流遺跡（同）では，中国などから輸入された中世の陶磁器や近畿・東海地方などから持ち込まれた国内陶器が多数出土しており，他地域との盛んな交流があったことがうかがえます。

また，これらの遺跡からは，平安時代から江戸時代までの建物跡や調理施設，墓などが数多く発見されており，一帯に大規模な集落が長期間にわたって広がっていたことがわかりました。

かまどの跡：上水流遺跡

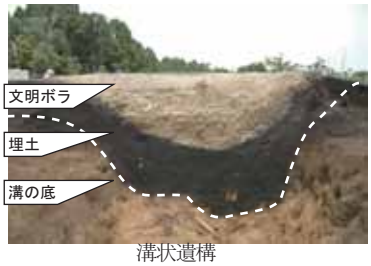
輸入陶磁器：持躰松遺跡



火山灰に覆われた溝跡

関山西遺跡（曽於市）では，西暦 1,471年に桜島から噴出した軽石（文明ボラ）で埋もれた溝が発見されました。

溝の底には杭の跡も見つかり，近くには青磁・白磁等も出土していることから，溝の周囲に何らかの施設が存在した可能性が考えられます。



溝状遺構

近世（江戸時代）

殿様も通った道

市ノ原遺跡第２・４地点（日置市）では，江戸時代の道路跡が発見されました。

その道路は，主要街道であった「出水筋」の一部で，道幅が3.5～5.4mあり，両側には側溝もあります。

薩摩の殿様も参勤交代で利用し，多くの人やモノが往き来した道路でした。

道跡

平成19年度刊行報告書一覧

報告書番号	遺跡名	報告書番号	遺跡名
119	荒木貝塚・和早地遺跡	126	関山西遺跡
120	持躰松遺跡	127	唐尾・高古塚・菅牟田・中之迫遺跡
121	上水流遺跡	128	仁田尾遺跡
122	諏訪脇・宗円堀・神原・頭無・頭無迫田遺跡	129	向栫城跡
123	堂園遺跡B地点	130	市ノ原遺跡第２・４地点
124	西原・原村Ⅰ・原村Ⅱ・牧ノ原遺跡	131	霜月田・都原遺跡
125	関山・鳥居川・チシャノ木遺跡	132	鷲ヶ迫・北原中・宇都上遺跡

シリーズ 埋文豆知識⑦ 土器に塗られた「赤い色」の正体

土器や石器の表面に塗られた赤い色。私たちの先祖は，旧石器時代のころから「色」を意識して使っていました。その中でも，赤い色には魔よけや祝いなど特別な意味が込められていたようです。

今回は，この赤い色に注目してみましょう。

赤い色のもとになるもの

赤い色のもとになるものは，「水に溶けない赤色の粉」で，赤色顔料といい，大まかに分類すると上のようになります。鉄・水銀・鉛などの金属が，酸素や硫黄などと結びついてできた物質がもとになっています。この中で，鉄が主成分である「ベンガラ」は，鹿児島県でも縄文時代の遺跡から出土しています。

種類	主成分
ベンガラ	酸化鉄
朱	硫化水銀
鉛丹	四三酸化鉛

写真１　顔料が塗られた土器内面（上山路山遺跡）

遺跡出土のベンガラ

写真１の上山路山遺跡（日置市）出土の岩本式土器（縄文時代早期初頭）に塗られた赤色顔料は，赤鉄鉱などの天然の鉱物を細かくつぶして作られたとみられるベンガラでした。一方，関山遺跡（曽於市）では，変形撚糸文の大きな深鉢（縄文時代早期後葉）の中に，たくさんのベンガラが入った小形の土器が収められた状態で出土しました（写真２）。このベンガラは，沼や用水路などに発生する赤さびのようなもの（含水水酸化鉄）を焼いて作ったものと考えられています。

写真２　顔料が入った土器（関山遺跡）

原料の違いを調べる

見た目ではわからないこの違いを解明してくれる装置が，電子顕微鏡です。関山遺跡と上山路山遺跡の赤色顔料を走査型電子顕微鏡で観察すると，それぞれ写真３・４のように見えます。写真３は，小さなパイプが集まっているように見えるので「パイプ状ベンガラ」と呼び，写真４のように形がはっきりしないものは，「非パイプ状ベンガラ」と呼んでいます。

考古学の世界で活躍する分析機器①
走査型電子顕微鏡

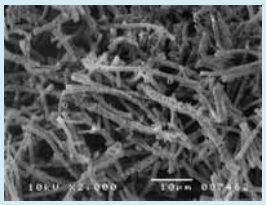


写真３　パイプ状ベンガラ

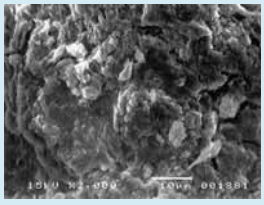


写真４　非パイプ状ベンガラ

土器などの表面に付着した顔料や，土器表面のくぼみ，遺跡の土壌に含まれる花粉などの観察に利用します。最大で20万倍まで拡大可能ですが，通常は数千倍程度までで十分観察できます。学校で使う顕微鏡は，100倍以上になるとピント合わせに苦労しますが，電子顕微鏡は倍率を上げてもピントの合う範囲が広いので，細かいところまで観察することができます。

身近な顔料ベンガラ

現在は，技術の進歩やコストなどの面から，化学的に合成されたものが主流になっています。ベンガラは，光や熱に強いなど化学的に安定した物質であり，無害であるため，絵の具や塗料・化粧品など，私たちの身の回りで幅広く利用されています。

当センターの見学は，土曜・日曜・祝日・年末年始を除き，毎日午前９時～午後５時まで，入館料は無料です。お近くにお越しの節はぜひお立ち寄りください。
なお，当センターのホームページは，鹿児島県教育委員会（http://www.pref.kagoshima.jp/kyoiku/）または，上野原縄文の森（http://www.jomon-no-mori.jp）からお入りください。

埋文だより　第47号
発　行　日　平成20年６月18日
編集・発行　鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899-4318　鹿児島県霧島市
国分上野原縄文の森２番１号
TEL 0995-48-5811・FAX 0995-48-5820
URL:http://www.jomon-no-mori.jp
E-mail:maibun@jomon-no-mori.jp